

平成 22 年 5 月 26 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006 ～ 2009

課題番号：18520333

研究課題名（和文） 漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成

研究課題名（英文） The Formation of Modern Mongolian Lexicon Under Influence of Chinese

研究代表者

呼和巴特爾（HUHBATOR）

昭和女子大学・生活機構研究科・准教授

研究者番号：80338540

研究成果の概要（和文）：社会が大きく変わればことばも大きく変わる。明治以降、日本が近代社会をつくりあげるために、日本語になかった数多くの新しい概念を西洋の言語から翻訳し、現代日本語語彙の基礎をつくった。同じく、中国や朝鮮でも近代化を進めるために日本語から多くの新しい語彙を導入した。では、モンゴル語のばあいほどのように語彙の近代化を進めたのか。本研究では特定の資料の収集と分析によりモンゴル語近代語彙形成初期のプロセスを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：When the society changes greatly, the words change greatly. The Japanese translated a lot of new concepts from Western languages after the Meiji era, which made up the basics of the present-day Japanese vocabulary. Similarly, China and Korea introduced a lot of new vocabulary from Japanese to push forward their modernization. So, how about the modernization of the vocabulary in the case of Mongolian language? In this study, I collected some specific documents and clarified the process of the early period of modern Mongolian vocabulary formation by analyzing them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,100,000	450,000	2,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：①モンゴル語 ②漢字語 ③近代語彙 ④意識語 ⑤言語の近代化 ⑥言語接触

1. 研究開始当初の背景

19世紀末のアジアでは明治維新以降の日本に続いて中国も近代への模索を始めた。中国の啓蒙者たちは西洋の新しい概念を導入するため、日本で作られた新漢語を積極的に取り入れた。そのために、現代中国語には日

本語と共通の近代語彙が多く、それが中国語近代語彙の基盤をなしている。漢字圏に含まれる朝鮮語にも日本で作られた新漢語が数多く導入されている。日本語の近代語彙が中国語や朝鮮語に与えた影響については多くの研究成果が現れているが、漢字圏に含まれ

ないアジアの諸国や諸民族、とりわけ、政治的に、文化的に中国と日本の強い影響を受けてきた内モンゴル（外モンゴルも 1910 年代まで中国語の影響を受けている）におけるモンゴル語語彙の近代化はどのように行なわれてきたものか。

報告者は 1980 年代に中国で日本語を学んでいたときから日本語が中国語に与えた影響について考えていたが、その延長として、1990 年代からは日本語の近代語彙が直接、または間接的にモンゴル語に影響を与えたことのかかわりから、中国語の近代語彙がモンゴル語に直接影響したことについて考えるようになり、研究を行なってきた。その成果として、1997 年に一橋大学大学院社会学研究科に「漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成——中国領内のモンゴル語定期刊行物発達史に沿って——」という博士学位請求論文を提出し、学位を取得した。しかし、それは全体における記述であり、その後、中国国内や日本、ドイツなど海外の諸資料館からこの研究にとって重要な一次資料を数多く入手できたため、時代別、地域別の詳細な考察が求められるようになった。

2. 研究の目的

これまで東アジア諸国では近代語彙について、相互の影響や交流などに関する研究が行なわれてきたが、モンゴル語が漢字を使わないため、また、モンゴル語が漢字音の語彙を体系的にもたないため、この分野の研究でモンゴル語が言及されることはほとんどなかった。現在も他の研究者によるこの領域の研究はほとんど見られない。

これまでのモンゴル語学研究における語彙研究は、基本的に、語構成を中心に行なわれ、言語の内在的变化や発展についての考察が重んじられていたため、モンゴル社会に大変革が起きた 20 世紀前半に遊牧民のことばであったモンゴル語がアジアの周辺国や民族から押し寄せられてきた近代化の波に対し、どう臨み、どう応えてきたのか、そして、モンゴル語は自らをどう近代化してきたのか、また、モンゴル語の変化や発展に大きな影響を与えた外的要因は何であったのかなどについて、社会言語学の視点から研究することはなかった。

それに、モンゴル語語彙の研究領域において外来語の研究はあっても、外来の概念としての 20 世紀以来の西洋の新しい用語や新語がいかにか翻訳の形式でモンゴル語に導入されたかについても、学術的にアプローチされることは少なく、新語の登場やそれによるモンゴル語語彙の発展は、モンゴル人民共和国では、1921 年の社会主義革命の成果として讃えられ、内モンゴル自治区など中国領内のモ

ンゴル族居住地帯では、1949 年の中華人民共和国の誕生による解放のためと言われ、新語についての言及は社会主義の新しい体制と結び付けられるのが一般的であった。

本研究は、上述のように、東アジアの漢字圏諸国におけるこの分野の研究の影響によるもので、モンゴル語の研究においては新しい研究領域の開拓である。

このように、本研究では、主として 20 世紀以来、中国語と日本語の近代語彙といった漢語から直訳されたモンゴル語近代語彙形成のプロセスを解明することにより、モンゴル語近代語彙研究体系の成立が期待される。したがって、本研究はモンゴル語の研究のみならず、漢語による近代語彙が非漢字圏の言語に与えた影響という新たな内容を加えることにより、東アジア諸国における言語の近代化及びその相互の影響や関連に見られる言語接触の実態を解明するうえで特別な意義をもつと考える。

本研究課題では、すでに入手した資料の分析、研究を充実させ、これまで十分調査できなかった、または調査していない国や地域での調査を実現させることにより、最終的に日本語の新漢語を含む漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙形成の全過程を明らかにするよう長期的な研究を行ない続けるが、現段階では、モンゴル語近代語彙形成のプロセスを考察するうえでもっとも重要な部分である初期段階の形成過程を詳細に記述し、明らかにするのが重要な課題である。

3. 研究の方法

時代区分の用語としての「近代」は、国により、考え方によりそこに区分される歴史時代が異なる。それが政治的に決まることもあるので、モンゴルのような分断民族は同一の民族であっても近代史の時代区分が異なる。この理由によるものばかりではないが、この研究はモンゴル民族、あるいはモンゴル語にとって「近代」に区分される時代に登場したすべての語彙を研究対象にするものではない。ここでは今までのモンゴル語研究に欠けていたモンゴル語の近代化についての研究、とりわけ、語彙の近代化という視点からの研究を行ない、具体的には、おびただしい近代的な概念をモンゴル語がいかに取り入れたかというプロセスについて研究する。そのため、「近代語彙」というキーワードや用語は、西洋の近代文化、社会構造、科学技術、工業生産などと関係のある語彙、つまり、「近代化の語彙」、「近代化がもたらした語彙」という意味で使う。

近代的な意味や概念を表す語彙を西洋語から翻訳すること自体がアジア的な現象なので、東アジア漢字圏の諸国、とりわけ日本

の言語学界にはその出典や漢字圏国との共通の語彙などを考察する研究分野があり、その研究対照である語彙のことを日本語では「近代訳語」、「翻訳語」、「新語」、「漢訳語」、「新漢語」、「近代漢語」、「近代語彙」、または「文明のことば」「明治生まれの日本語」などと、取り扱い方や考え方によりさまざまな名称が与えられてきたが、学術用語として定着した名称はまだ存在しないのが現状である。

日本語と中国語や韓国語などでは、近代語彙の研究のために、辞書や特定の出版物を語彙資料として用いるのが一般的である。しかし、モンゴル語のばあいは、辞書に近代語彙が登場するようになるのは定期刊行物など、同時代の語彙を反映させた出版物の登場に比べればかなり遅く、かつ、限られた語彙しか掲載されていなかった。そのために、近代的な内容のモンゴル語出版物がほとんどなかった 20 世紀の半ばまでの内モンゴルにとって、清朝 (20 世紀初頭から 1911 年まで)、北洋政府 (1911-28)、中華民国政府 (1928-49)、日本軍支配 (1918-45) といった各時代や地域の支配者側から出されたモンゴル語定期刊行物が、モンゴル語近代語彙の登場と変遷を知る上で基本的な語彙資料になっている。したがって、本研究全体においては、まずモンゴル語に近代語彙が登場しはじめたころのモンゴル語定期刊行物から 20 世紀のなかば、つまり、内モンゴルにおけるモンゴル語の近代語彙体系が形成するまでのモンゴル語定期刊行物を体系的に収集することが求められるが、それ自体がモンゴル語定期刊行物の歴史的研究やモンゴル語出版史の研究にもつながる。

古いモンゴル語定期刊行物の収録情況については、具体的に、中国側で発行されたもっとも広く利用されている基本資料として、内蒙古自治区図書館編『建国前内蒙古地方報刊考録』(呼和浩特 1987 年)をあげることができる。本書には、清朝末期から中華人民共和国建国までのモンゴル語定期刊行物は、「蒙漢合璧」を含む 74 種(雑誌 44 種、新聞 30 種で、その中で所在未確認 28 種)が収録されているが、報告者の研究調査により収録された古いモンゴル語定期刊行物は 1997 年の段階ですでに 109 種類にのぼり、その後も例えば、ドイツのボン大学で 4 種類、約 2000 枚にわたる資料(これらの資料はドイツの著名なモンゴル学者故 W. Heissig 教授が 1940 年代前半に内モンゴル東部から集めたものであった)を入手しているなど、その数は増え続けている。このように、報告者がこれまでに世界各地から体系的に収集した古いモンゴル語定期刊行物の多くを本研究におけるモンゴル語語彙の分析に利用している。本報告書の「研究成果」にも見られる

ように、本研究では、光緒 34 年 (1908) 4 月に吉林調査局から発行された現在利用できるもっとも古いモンゴル語定期刊行物である「蒙漢合璧」雑誌 *Mongvul üsüg-ün bodurul* (『蒙話報』) の分析を集中的に行い、そのほかに、同時代のモンゴル語近代語彙を反映できる資料として、『万国公法』のモンゴル語版をはじめ、1910 年代初期、外モンゴルで出された下記のモンゴル語書籍や新聞雑誌を収集し、そのモンゴル語語彙と『蒙話報』のモンゴル語語彙との比較研究を行っている。*Mongvul üsüg-ün bodurul* (蒙話報) は、中国ではその第二十五期しか保存が確認されていないが、日本では第一期から第二十五期(但し、第八期と二十四期は欠)が東洋文庫に保管されている。筆者がこれに注目し、研究しはじめたのは今から十数年前のことであり、当初はモンゴル語定期刊行物研究の資料収集で見つけたが、この雑誌はモンゴル語定期刊行物史の研究のためにはいうまでもなく、モンゴル語近代語彙の形成という新しい研究を始めるのにもその土台を作る貴重な資料になった。そのため、報告者はこの雑誌に登場した語彙の分析からモンゴル語近代語彙形成のプロセスを研究しはじめた。その同時代の参考資料は次の通りである。

① *Tümen ulus-un yerüde-yin čavaja* (『万国公法』(Henry Wheaton. *Elements of International Law*. 1836) (後述)。

② *Mongvul-un sonin bičig* (モンゴル新聞) : ハルビンの遠東報館から発行されていたこの定期刊行物は、1909 年 5 月から 1912 年 9 月までは雑誌だったが、同年 9 月から新聞に変わり、1919 年 3 月 1 日付けの 273 号まで発行が続いていた。

③ *Šin-e toil kemekü bičig* (新しい鏡という書) : 1913 年 3 月に当時のニースレル・フレー(現在のウランバートル)に創刊された雑誌である。この雑誌は創刊年代が『蒙話報』とはだいぶずれるが、モンゴル独立宣言以降初めての、つまり、外モンゴルで出された初めての定期刊行物であるため利用する価値は高い。この定期刊行物は、当時ニースレル・フレーで活躍していたジャムツァラーノがロシア公使コロストヴェツの指示で創刊したもので、最初の四期が雑誌で、その後新聞になった。

④ *Ulus-un erke* (国家の権利) : 本書は、1911 年に外モンゴルでボグド・ハーン政権が成立した当初、外務省の教育・文化局長を務めていたブリヤート・モンゴル出身のツェウエン・ジャムツァラーノが、当時の総理大臣であったサインノヨン・ナムナンスレンの依頼により書かれたもので、1910 年代前半に書かれたのではないかと推定される。

⑤ *Eldeb uqavan-i badaravuluvsan bičig* (諸学問を發揚させる書) : ボグド・ハーン

の時代のモンゴル語、あるいは、ジャムツァラーノのことばで Eldeb uqavan は、どちらかといえば「諸教科」の意味で使われていた。1912年3月にジャムツァラーノは当時の外務大臣だったハンドドルジ・チンワンに近代的な学校を創るための具体的な提案を行なったが、その時、uqavan buri-yin debter (諸教科の本) をモンゴル語に翻訳することも提案項目の一つにしている。実際、ジャムツァラーノがその提案の中で、eldeb uqavan (さまざまな教科)、olan uqavan (多くの教科)、juil buri-yin uqavan (いろいろな教科) という用語を使っている。本書は、1913年3月にニースレル・フレで出版されているが、ジャムツァラーノの手によるものだと考えられる。本書を構成する、Yirtinçü-yin bayidal tölüb (地球の概況)、Delekei degereki olun ulus-un neris anu (世界諸国の名称) が本研究では貴重な資料として利用されている。

⑥ Γadavadu olan ulus-un tobçiy-a (諸外国の概況) : この本には「ラバダノヴォ (Rabdanowu) がロシア語からモンゴル語に訳した」と書いてあるだけで、出版年代も出版された場所も不明である。訳者はブリヤート・モンゴル出身者であろう。活字体は、ニースレル・フレにあった Orus üsüg-ün keblel-ün qoriy-a (ロシア文字出版社) から出された書物と同じで、前記 Ulus-un erke (国家の権利) と同じである。このように、発行年代や著者・役者などに関しては現時点で若干不明な資料もあるが、いずれも1910年代半ばころまでのモンゴル語語彙を知るうえでは欠かせない重要な資料である。

4. 研究成果

(1) 資料の収集とまとめ、公表

①本研究で「モンゴル語近代語彙登場の母体」と位置付けている『蒙話報』誌「第三十三期」を中国の上海図書館で特別許可を得て入手した。現時点ではその所蔵がほかに確認されていない。

②モンゴル国での資料調査で、前記数種類の雑誌などをはじめ、2006年に文献資料として刊行された前記 Tümen ulus-un yerüde-yin çavaja『万国公法』(Henry Wheaton. Elements of International Law. 1836) のモンゴル語版を入手した。1911年以前に外モンゴルで中国語から翻訳されたと考えられている『万国公法』(手書き) は、1937年にモンゴル科学アカデミーから出された『モンゴル国立図書館所蔵図書目録』の中でも発行(翻訳)年代不明、翻訳者不明であったが、この訳書は、モンゴル語近代語彙の形成における中国語の影響について考えるうえでたいへん重要な資料であり、本研究でその一部について分

析を進めている。

③日本にも多く所蔵されている20世紀前半に中国各地で発行されたモンゴル語定期刊行物について、最近十数年来の内外における調査や研究状況について考察し、その成果を「中国領内発行の古いモンゴル語定期刊行物——モンゴル語定期刊行物の所蔵と研究の状況——」というタイトルの論文としてまとめ、学内研究誌に発表している。

(2) これまでの研究の蓄積と成果を踏まえ、現在見られるもっとも古い、かつ、比較的長期にわたって発行されてきた前記モンゴル語(漢蒙合璧)雑誌 Mongovul üsüg-ün bodurul (『蒙話報』) を「モンゴル語近代語彙登場の母体」と位置付けたうえで、その語彙研究を続け、口頭発表と論文発表を行った。

具体的には、本報告書の「5. 主な発表論文等」にもタイトルが掲載されている次の内容の研究発表を行なっている。

①「モンゴル語近代語彙登場の母体——『蒙話報』誌(五)——近代語彙の抽出・分類及び存廃の時代別考察——」

本論文では、モンゴル語近代語彙を抽出するに当たり、「近代語彙」についての視点とモンゴル語近代語彙の弁別についての考え方を述べ、『蒙話報』誌の23冊に含まれる中国語の見出し語844語を抽出し、さらにそれを分野ごとに七つの部分に再分類した。それから、見出し語の比較と訳語の存廃について、その後の各時代の代表的な辞書や語彙集と比較し、その結果を分析している。

②「モンゴル語近代語彙登場の母体——『蒙話報』誌(六)——資料比較にみる外国語固有名詞のモンゴル語表記——」

本論文では、20世紀の初めころ中国語からモンゴル語に翻訳された『万国公法』(英語からの中国語訳は1865年) が近年モンゴル国で出版されたことを受け、『万国公法』のモンゴル訳をはじめとする当時の諸文献に掲載されていたヨーロッパ諸国名など、地名や地理用語を、報告者がこれまで研究してきた『蒙話報』のばあいと比較し、考察した。現在まで、外国名のモンゴル語表記の出典を中国語の影響から考察した研究はなく、本研究では、ヨーロッパ諸国名のモンゴル語表記自体をモンゴル語の「近代語彙」として位置づけている。

(3) 小規模ではあるが、中国の大学、具体的には、北京にある人民大学の外国語学部日本語学科の漢族の学生たちと、内モンゴル大学外国語学部日本語学科のモンゴル族の学生たちを対象に、現代日本語と現代中国語の漢字語による近代語彙に関する意識調査を試みた。これは現代日本語と現代中国語に共通の漢字語彙が多いことを不思議に思っていた報告者の学生時代の経験によるものであった。アンケート調査の結果、中国の多く

の学生たちが両言語の近代語彙における関連性についてあまり知識がなかったこと、またはあまり意識していなかったことが把握された。

(4) 現在使用できる『蒙話報』誌(1-33期、欠8, 24, 26, 28-32期)全語彙について、出版に向けてのモンゴル文字転写の完成、出版の記述、または、再確認する作業を行なった。これまでの作業の継続ではあるが、たいへん労力と時間を消耗する作業である。

(5) 『蒙話報』誌モンゴル語近代語彙の語構成の分析を進めている。分析は進行中であるが、モンゴル語近代語彙の形成の研究において重要な一環であり、本研究の成果としての出版に向けて完成させる予定である。

これらの研究は、この研究課題における新たな到達点であり、国内外のこの領域の研究において今後の研究の土台となると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1) フフバートル「モンゴル語近代語彙登場の母体——『蒙話報』誌(六)——資料比較にみる外国語固有名詞のモンゴル語表記——」『学苑』787号 31~39頁 昭和女子大学近代文化研究所 2008年10月 査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007054853>

(2) フフバートル「中国領内発行の古いモンゴル語定期刊行物——モンゴル語定期刊行物の所蔵と研究の状況——」『学苑』799号 76~89頁 昭和女子大学近代文化研究所 2007年5月 査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006424495>

(3) フフバートル「モンゴル語近代語彙登場の母体——『蒙話報』誌(五)——近代語彙の抽出・分類及び存廢の時代別考察——」『学苑』787号 13~25頁 昭和女子大学近代文化研究所 2006年5月 査読有
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110004999424>

[学会発表] (計1件)

Huhbator Borjigin. Transition of Foreign Names in Modern Mongolian: Through the Comparison with " *Menghua Bao* " and the Mongolian Version of " *Wnaguo Gongfa* ". A New Global Order in North East Asia——Proceeding of the International Symposium on Global Order from the Perspective of Archives, History, Literature, and Media——Focus on North East Asian Society——. June 23-25, 2008. Ulaanbaatar, Mongolia

[図書] (計1件)

Kökebayatur. Transition of Foreign Names in Modern Mongolian: Through the Comparison with " *Menghua Bao* " and the Mongolian version of " *Wanguo Gongfa* ". (pp. 267-276). 今西淳子, Ulziibaatar Demberel, Husel Borjigin 編著『東北アジアの新しい秩序を探る (A New Global Order in North East Asia)』風響社 2009年3月 (当初内モンゴルで出版される予定だったため原稿はモンゴル文字による)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

呼和巴特爾 (HUHBATOR)

昭和女子大学・生活機構研究科・准教授
研究者番号: 80338540

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし